

園長先生の子育てひろば

令和8年3月

取り返しは、ちゃんとつく

園長 堀田あけみ

世の中に絶対的な真理はありません。「常識」と言われることも、次々と変化します。

例えば、皆さんは、歯をどんなふうに磨きますか？鉛筆のように持って、小刻みな横向きの動きで磨くのではないのでしょうか。私の記憶では、大学生くらいの頃までは縦向きに磨いていました。その前は、横磨きです。それまで正しかったものが、「間違いですよ」と言われることは、ときどき起こります。

子育ての面で言うと、以前にも触れました「抱き癖」がそれですね。泣く子は放置して泣かない子に育てるべき、と言う時代から、泣いたら構ってあげて、というのが常識になりました。

「子どもの心は、一旦傷付いたら取り返しがつかない」と言われていた時代があります。子どもに対する体罰が、効果的な方法と信じられて行われていた時代の反動は、一度でも手を上げたら取り返しがつかないという暴論を生み出しました。子どもの目の前で暴力的な行動をとると、子どももそのような行動をとりがちになるといった暴力の観察学習の研究が熱心になされた時代です。体罰が当然とされていた世論を覆し、子どもを守るための流れでしたが、一方でこれは育児を担う側にとって大変なプレッシャーにもなりました。思わず一度だけ手を上げてしまったとか、危険なことをした子どもを手荒く制止したとかいった経験のあるお母さんは、真面目な人ほど思い悩むことになります。

大前提として、子どもは守られるべきものです。子どもへの虐待というと、暴力・暴言だと思われがちですが、こども家庭庁の定義では「身体的」「心理的」「性的」な虐待に加えてネグレクトが含まれます。子どもが見ているところでの、本人以外の家族（個人的には家族に限る必要はないと思っています）への暴力・暴言も含まれることは、意外と知られていません。これは「面前DV」呼ばれます。「本人はゲームしてたから面前じゃない」との言い訳も結構あるそうですが、もちろん子どもがスマホを見ていようが、背中を向けてゲームをしていようが、言い訳にはなりません。

でも、その場の勢いでちょっと間違えてしまったときに、改善は可能です。だって、悪い条件が重なって、つい大きな声をあげてしまったとか、手が出てしまったとかいうことは、ありますよね。一回でも虐待は虐待、と言われるのですが、虐待もハラスメントもいじめも、継続性があるから問題なのです。

世の中の流れが変わる中で、検証を重ねて子育ての常識も変わってきました。少し前の養育者に厳しすぎた時代がなぜ生じたかという、私は2つの原因があると思います。一つは、先述の前時代にあった「体罰上等」的な空気に対するアンチテーゼ、もう一つは当時の発達心理学者のほとんどが男性だったからではないでしょうか。私が心理学を学び始めてからも、学会で「あれ？」という発表に何度か出会いました。「今、欧米では添い寝の効果が主張されています。日本でも取り入れるべきです」「昔からしてますよ」といった具合に。

子育ては、子ども本位でなされるものです。しかし、養育側のメンタルケアも無視できません。そのバランスを取りたいけれど、うまくいっているかしら。不安になる方は、きつとうまくいっています。バランスを取れていなければ、不安になることもありませんから。ちょっと大きな声を出してしまったら、明確に謝罪して抱きしめましょう。